

どうやって子どもに興味を持ってもらう？ ～ポジティブな声かけで子どもを導こう

小学校入学前後の年頃になると、勉強とは別に、習い事として運動をさせている家庭も多いのではないだろうか。「2020年日本児童興味班調査」の記事からもわかるように、習い事を始める年齢としては5歳頃から始める割合が高い。プールが一番人気であるがサッカーや野球といったボールを使う集団スポーツにも根強い人気はある。では、どのように子どもに興味を持ってもらうのか？おもちゃ買ってあげるからプール習おうかなど物や報酬で釣るのはモチベーションも上がりやすいので確かに良い方法の一つではある。しかし、だんだんと報酬が大きくなるのも大変である。今回は野球を例に、幼児と運動の出会い、興味を持たせ方についてみてみることにしよう。

幼児教育において運動というと、園庭や公園などでの外遊びや散歩も運動となる。最初は歩くこと、走ることから始まり、飛んだり登ったり、それから、徐々にボールなどの道具を使うことを覚え、慣れていく。子どもに何か興味を持ってもらうためには、興味を持つように誘導してあげることが大切となる。ここで言う誘導とは、無理やりその方へ仕向けるのではなく、子どもが「楽しいそう！」「自分もやってみたい！」と自ら思うようにしてあげることである。この手助けができるのは、子どもの近くにいる保護者や先生たちである。



子どもは大人と違い、恐れを知らず、常に興味とやる気に満ち溢れています。そして、真似をすることがとても得意です。もし、子どもに何かしてほしいことがあるのなら、まずは大人がそれを楽しそうにしているところを見せることが一番です。身近な大人や兄弟姉妹

などが何か楽しそうにしていれば、子どもは自ずと興味がわき、「私も！」「ぼくもする！」と言ってくるはずです。

筆者の子どもは幼稚園で体操をする時間にたまたま野球をする機会があり、それで楽しいと感じて興味を持ったようです。ここでの野球は大人がする野球と違い、バットも短く太く、やわらかい、子供用の野球です。それまで野球とは何かを知らなかったので、きっと本人は野球というものが何のことを指すのかさえもわからないままに、先生に手伝ってもらいながらバットを持ち、構えて、飛んできたボールをたまたま打ったのでしょう。きっと本人にとっては、打てたこといいのか悪いのかさえも分からなかったはず。その場にいた周りの反応、すなわち、先生やお友達たちの「すごい！」「打てた！」「やったね！」「いいね！」などの反応を見て、打てたことはよかったことなのだとわかり、「できた！たのしい！」と思ったのでしょう。そして、野球とはバットという棒で飛んできたボールを打つことなのだと自分の中で習得するはず。

ここで大事となるのが周りの反応と声かけである。バッドでボールが打てたという事実に対して、大人が先のようなポジティブの反応をすれば、子どもも前向きにとらえることができるが、一方で、大人が、「あんなボールだったのにちょっとしか打てなかったの？」「下手だね。」のようなネガティブの反応を示せば子どもは、自分は野球ができないのだと野球に対して苦手意識を抱いてしまうことでしょう。

子どもが何か新しいことをしたときは新たな可能性が広がるチャンスなのです。そして何事も、最初が肝心です。どんなに小さなことでもいいので、何かいいところやがんばったところをほめてあげることが大切です。「すごいね」「できたね」でももちろんいいのですが、できればもっと詳しく「飛んできたボールを上手に打てたね！」「初めてだったのに野球ができたね！」と何ができたのかを子どもに言ってあげることが子どもの自信に繋がります。そうすることで、子どもにとっては、「ぼくはボールを上手に打てた！」「野球ができた！」「おかあさんにほめてもらえた！」と自分はできるのだと感ずることができるよう。これがよく言われている自己肯定感というものです。

筆者の場合は、体操の先生から野球で上手にボールを打てたと聞いたので、家に帰った後に子どもから野球をした話を聞きだして、ボールを打てたことを大いに褒めてあげました。

たまたまボールが打てたくらいでそんな大げさにほめなくてもと思うかもしれませんが、自信を持てることが何よりも大切なので、ほめるのは大げさなくらいでも全く問題ありません。ただし、先にも述べたように、よかったとだけほめるだけではなく、何が良かったのかも含めて伝えてあげることが大切です。

子どもは大人の思う通りには行かないが、声掛けによって導くことはできる。大人がポジティブな声掛けを意識することで、子どもにも自信をもって人生は楽しいのだと思って歩んでいてほしいものである。

野球のことをすっかり忘れて半年ほど経った頃、子どもが急に友達に誘われたから今度野球チームに行ってみたいと自ら言い出したのです。筆者はとても驚きました。というのは、実は、筆者はまったく野球に興味がなかったのです。しかしながら、子どもが自らしたいと言い出したことなので、これは一緒に行かなくてはと思い連れて行きました。





野球体験では、子どもたちにまずは楽しんでもらおうということで、ゲームのようにさせてくれました。親子一緒に参加して、片手にお皿を持ち、その上にボールを載せて競争したり、ボールを投げて番号のついた札を落として競い合ったりしました。どれも野球に似せたゲームです。まずは、楽しさから興味を持ってもらう。最終的には野球をしたいと手を挙げた参加者がたくさんいました。筆者の子どももやりたいと手を挙げた一人でした。筆者もさせてあげたかったのですが、体験したクラブの練習日が土日祝日と多かったので、子どもと相談してもう少し練習日が少ないほかの野球クラブを探すことに決めました。





今回の野球体験の結果はクラブにはまだ入らないということになったが、子どもにとっては、野球体験ができたこと自体は楽しかったことであり、野球についても楽しい、好きという経験を積むことができた。幼稚園で初めて野球を経験して、そこでポジティブな印象を持ったことで、今回の体験に繋げることができた。今回も野球に対しては楽しいという良い印象を持っているので、きっとこの先もまた何かに巡り合えるだろう。

ここでの収穫は、野球という新しいことに興味を持ったこと。楽しいと思えたこと。そして、大人が子どもに飛んできたボールをバットで上手に打てたと伝えたことで子どもが自分は上手に打てたのだとできるということを実感できたこと。自信を持てたこと。

子育てはすぐに結果は出ないもの。しかしながら、ここでの収穫がやがてこの先の次への一歩に繋がっていくことと信じて、これからも見守って行きたい。

文/写真：原田捷子